

らびプラス

舌や頬の内側、歯肉などに発生する口腔(じふく)がんの患者が増えている。50歳以上が患者の約8割を占める。とされ、高齢社会が進む日本では、この傾向がしばらく続きそうだ。注意していないと気づきにくいいため、知らないうちに病気が進行している(と)が多い。「早期発見が大切」と専門家は強調している。

東京都内に住む60代男性のAさんは、舌に白い部分が増えてきたのに気づいた。近くの歯科医院を受診し、「口内炎なのでそのままでも治る」といわれた。ただ症状が消えないため、気になって再び受診すると、白い状態が続く(白板(はくばん)症と診断を受けた。

その後、病院の口腔外科を訪れ調べてもらったところ、初期のがんと分かった。患部を外科手術で取り除いた。早期だったので1時間もかからずに終わり、1週間で退院した。

「口の中にもがんができる」とを知らない人が多い。昭和大学歯科病院に4月に発足した

口腔がん

自分で月1回チェック

口腔がんのチェック

- 1 明るいうちで鏡を用意。入れ歯があれば外す
- 2 唇を上や下に引っ張って、唇の内側や前歯の歯肉を見る
- 3 顔を後ろにそらし、上あごの天井部分を見る
- 4 左右それぞれの頬を外へ引っ張り、頬の内側や上下の奥歯の歯肉を見る
- 5 舌を出し、表側だけでなく側面、裏面も見る

注意ポイント

- ・粘膜にできた凹凸や潰瘍
- ・粘膜が赤くなったり、白くなったりした部分
- ・口内炎のような症状が2週間以上続く場合や、サイズが1センチ以上で痛くない場合
- ・粘膜の下に固まりや厚みがある
- ・かみづらい感じ、頬や舌を動かすづらい感じ
- ・舌などのしびれやまひ
- ・歯肉からの出血
- ・首のリンパ節の腫れが3週間以上続く場合



(注)昭和大学歯科病院口腔外科の情報サイト「口腔がん.com」をもとに作成。口腔がんの種類を表も

口腔がんの種類と概要

舌がん	ほとんどは舌の側面や裏側にできる。粘膜の表面に症状(赤くなったり、白くなったり、凹凸や潰瘍ができた)りする。以下同じ)が表れ、触ると粘膜の下に固まりや厚みがある
頬粘膜がん	頬の内側の粘膜にできる。かんだり傷つけたりした覚えがないのに症状が表れ、触ると粘膜の下に固まりや厚みがある
歯肉がん	上下の歯肉にでき、粘膜に症状が表れる。歯がぐらぐらしたり、腫れたりすることもある。歯ぐきの裏側にできることも多い
口蓋がん	上あごの天井部分にできる。傷つけた覚えがないのに、症状が表れる
口底がん	下あごの歯ぐきの内側と舌の間の部分にできる。粘膜に症状が表れる。アルコールとの関係が深いといわれる

早期発見が大事
口腔がんは最も多いのが舌にできるタイプ。このほか、頬の内側、歯肉、上あごの天井部分、歯肉と舌の間などにできることもある。いずれも早めに治療すれば治りやすく、QOLへの影響も少ない。早期発見が重要に

口内炎と似た症状 2週間続けば注意

発症の原因になるといわれているのは、喫煙や飲酒、虫歯や歯並びの悪い部分などがいつも頬の内側に当たるなど慢性的な機械的刺激。辛い・熱いといった食事の刺激、ウイルス感染、加齢なども関係すると考えられている。特にたばこは影響が大きいとされ、注意が必要だ。

気づきにくいがんだが、実は一般の人が自分で見つけやすいタイプでもある。比較的簡単にセルフチェックができるので、「月1回、実践してほしい」(新谷教授)。

チェックは明るいうちで鏡を用意する。唇の内側や前歯の歯肉、上あごの天井部分、左右それぞれ頬の内側や上下の奥歯の歯肉、さらに舌と見ていく。舌がんはほとんどが側面や裏側にできるため、表側以外もよく見る。

注意する症状は赤くなったり、白くなったりしている部分や凹凸や潰瘍のような状態。かんだり傷つけたりした覚えがないのにみられる場合は特に注意する。

症状は口内炎とよく似ているが、通常の口内炎は1週間から10日程度で治るので、2週間以上続く場合は注意しよう。サイズが1センチ以上と大きいのに痛くない場合も気をつける。症状

がみられる部分を触って、下に固まりや厚みのある部分がある場合も要注意だ。
赤くなったりは白板(こうばん)症、白くなったりは白板症と呼ばれる、がんになりやすい状態の「前がん病変」の可能性もある。ただ、これは早期発見の貴重なサインともいえる。新谷教授は「他のがんに比べ、前がん病変が見えるのが口腔がんの特徴。それだけ発見しやすい」と指摘する。

「発症しにくいがんでも、最終的にがんかどうか自分で判断しにくい。例えば歯肉のがんでは歯がぐらぐらしたり、腫れたり、出血したりすることもあるが、歯周病との区別が難しい。セルフチェックはあくまで可能性の発見で、気になる点があれば、口腔外科などを訪れ、専門家に相談しよう。」

自治体でも検診

将来は簡単な発見法が登場するかもしれない。東京医科歯科大学の小村健教授らのグループは、うがいをした液を調べて口腔がんを見つけて新技術に取り組んでいる。うがい液で粘膜からはがれた細胞の遺伝子を調べる手法だ。

口腔がん、白板症、健康な人など約190人を対象に試した結果、「SCCA1」というたんぱく質を作る遺伝子を目印にする約7割の感度で発見できるとの成果を昨秋発表した。

家庭でうがい液を取って送り検査してもらう簡便なキットが期待できるほか、見えにくいところにあるがんの発見にも威力を発揮する可能性がある。今後は精度向上など実用化に向けた研究を進める。

小村教授は「今は多くの自治体で口腔がん健診を実施するようになってきた。機会をとらえて受診してほしい。自分の口の中に何かを持つことが何よりも大切だ」と訴える。